

社会主義は「科学」か

——科学的社會主義論批判——

丸
山
敬
一

- 一 はじめに
- 二 エンゲルスの科学的社會主義論
- 三 ベルンシュタインの科学的社會主義論批判
- 四 社会主義が「科学」である恐ろしさ
- 五 むすび

ソ連・東欧における社会主義体制の崩壊を前にして、日本の左翼陣営では旧左翼も新左翼も共通の反応を示している。それは、ソ連・東欧の社会主義はスターリン、ブレジネフ流の、原則から逸脱した歪められた社会主義であって、本来の社会主義は他にあるのだという態度である。とりわけ、日本共産党は、この本来の社会主義を「科学的社会主義」と呼び、これさえ堅持しておれば、やがて真の社会主義社会をこの地上に樹立することができるのだと強調している。この党の出版物を読む者は、科学的社会主義という言葉が、いたるところに繰り返され、これは疑うべからざる絶対の真理であり、不滅の生命力をもったものであって、地上に自由、平等、平和、独立などあらゆる善なるものを実現する孫悟空の如意棒のごときものである、と考えられているのを知り一驚するであろう。ところが、そもそも「科学的社会主義とは何か」という疑問をもってこの党の出版物を読んでも、ほとんど満足した解答を得ることはできない。一九九〇年にこの党の中央委員会出版局の出した『科学的社会主義のすすめ』^①という本を読んでも、この党の書記局長の志位和夫氏が一九九二年に出したばかり『科学的社会主義とは何か』^②という本を読んでも、そこに学問的に厳密な定義を発見することはできない。また、最近不破哲三氏は『対話 科学的社会主義のすすめ』^③という本を出したが、この本の中にも科学的社会主義の明確な定義は見当たらない。ただ漠然と「今までの人類の諸科学の成果を集大成したものである」とか、「社会発展の法則に沿って労働者階級をはじめ人民大衆の根本的利益を擁護し人民解放をめざす運動の指針となる理論」などと述べられているにすぎない。我々はそのような説明で満足することはできない。もっと学問的に厳密な定義が必要である。その際三つのことが問われねばならない。①そもそも科学とは何なのか、②社会主義とは何なのか、③はたして社会主義は科学でありうるのか。本稿では、以上三つの問題を先人の著作の中を探った上で、科学的社会主義の理論が歴史上どのような政治的役割を果たしたかを追求したいと

思う。

二 エンゲルスの科学的社会主義論

科学的社会主義という言葉聞いて、誰しも思い浮かべるのは、エンゲルスの著作『空想から科学への社会主義の発展』（以下『空想から科学へ』と略記）であろう。この著作の中で、エンゲルスは、マルクスの二つの偉大な発見、すなわち「唯物史観の発見」と「剰余価値の発見による資本主義的生産の秘密の暴露」によって、社会主義は科学になった⁽⁴⁾、と述べている。

マルクスに先行する社会主義者、サン・シモン、フーリエ、ロバート・オーエンなどの社会改革案は、なるほどすばらしいものであり、敬意を払うべきものではあっても、彼らは歴史の発展法則を知らなかったため、それらは単なる願望、単なる空想にとどまらざるをえなかった。これらの改革案は、ただ外部から社会に押しつけられていたにすぎなかった。ところが、今やマルクスが出て、社会の発展法則＝唯物史観を発見したので、社会主義ははじめて、現実の物質的な基盤の上にすえられることになったのである。つまり、資本主義社会の矛盾の自己展開の先に社会主義社会が実現されうるということになったのである。そうエンゲルスは説明している。この説明をみると、「科学」という言葉が、「歴史的必然性」という言葉と同義に使われているということがわかるであろう。

唯物史観の公式は、『空想から科学へ』の中では次のように説明されている。

「唯物史観は次の命題から出発する。すなわち、生産が、そして生産についてはその生産物の交換が、あらゆる社会制度の基礎であり、歴史上に現れるどの社会においても、生産物の分配は、それとともにまた諸階級または諸身分への社会の区分は、なにを、どのようにして生産するか、そして生産されたものをどのようにして交換するかによっ

てきまるといふ命題である。この見地からすれば、あらゆる社会的變化と政治的變革との究極の原因は、人間の頭のなかに、永遠の真理や正義についての人間の洞察がますます深まってゆくということに、求めるべきではなく、生産および交換の様式の変化に求めなければならない。それはその時代の哲学にではなく、経済に求められなければならない」。

この文章の少し前には、ほぼ同じ内容のことが次のように述べられている。

「これまでのすべての歴史は、原始状態を別にすれば、階級闘争の歴史であつたということ、これらのたがいにたかいたか社会諸階級は、いつでもその時代の生産関係と交易関係との、一言でいえば経済的諸関係の産物であるということ、したがって、社会のそのときどきの経済構造が現実の土台をなしているのであつて、それぞれの歴史的時期の法的小および政治的諸制度や、宗教的、哲学的、その他の見解からなっている上部構造の全体は、究極においてこの土台から説明されるべきであるということが明らかになつた。・・・そして、これまでのように人間の存在をその意識から説明するのではなく、人間の意識をその存在から説明する道が見いだされたのである」。

周知のように、唯物史観のより厳密な定義は、マルクスの『経済学批判』の「序言」の中にみられる。そこには次のように書かれている。

「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の發展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的小および政治的小上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的物質的生活の生産様式が、社会的、政治的小および精神的小生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会

の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。その時に社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる⁷⁾。

以上三つの引用は、いずれも歴史的発展の一般的法則について述べたものであるが、これを特殊に資本主義的生産様式に適用してみると『資本論』第二四章第七節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の中の次のような表現になる。

「この収奪は、資本主義的生産そのものの内在的諸法則の作用によって、諸資本の集中によって、行なわれる。いつでも一人の資本家が多く資本家を打ち倒す。この集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて、ますます大きくなる規模での労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的应用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化、結合的社会的労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約、世界市場の網の中への世界各国の組み入れが發展し、したがってまた資本主義体制の国際的性格が發展する。この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数が絶えず減ってゆくにつれて、貧困、抑圧、隸属、墮落、搾取はますます増大してゆくが、しかしまた、絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大してゆく。資本独占は、それとともに開花し、それのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される⁸⁾」。

これらの引用から明らかのように、マルクスにあっては、社会主義社会は、社会の物質過程の矛盾の自己展開の中

から「一自然過程の必然性」をもって、「鋼鉄の必然性」をもって生み出されてくるものだ、というのであった。この物質的必然性の認識こそが社会主義を「科学」にしたのだ、とエンゲルスはいうのである。⁹⁾

このようなエンゲルスの主張を認めるとすれば、エンゲルスのいう科学的社會主義は、次の二つの特徴を持つことになる。①歴史過程の客観的必然性に重点をおいた高度に決定論的、宿命論的な理論であること。人類の主體的な歴史形成という契機が極度に軽視されていること。②人類の歴史の必然的な発展が、搾取や抑圧や階級のない「自由の王国」に向かって進んでいるとする高度に楽天的な哲学であること。

科学的社會主義のもう一つの礎石である「剰余価値の発見」についてはどうであろうか。この点につき『空想から科学へ』の中では次のように述べられている。

「従来の社會主義は、資本主義的生産様式と切り離せない労働者階級の搾取を激しく非難すればするほど、ますますこの搾取の本質がなんであるか、どうしてそれが発生するのかを明らかにすることができなくなった。だが、問題は、一方では、資本主義的生産様式をその歴史的連関のなかで示し、また一定の歴史的時期にとってのその必然性を明らかにし、したがってまたその没落の必然性を示すことだったのであり、他方では、あいかわらずおおいさされたままだったこの生産様式の内的性格を暴露することだったのである。この仕事は剰余価値の発見によってなされた。不払労働の取得が資本主義的生産様式とそれによっておこなわれる労働者の搾取との基本形態であるということ、資本家は、彼の労働者の労働力を、それが商品として商品市場でもっている価値どおりに買う場合でさえも、自分がそれに支払ったよりも多くの価値をこの労働力から引き出すのだということ、そして、この剰余価値によって形成される価値額が、結局、有産階級の手の中にたえず増大する資本量が積み上げられていく源泉なのだということ——これらのことが証明された。こうして、資本主義的生産と資本の生産との由来が説明されたのである」¹⁰⁾

少し引用文が多くなったが、ともかくエンゲルスはこのように「唯物史観の発見」と「剰余価値の発見」という二大発見によってマルクス主義は科学になった、というのである。エンゲルスのこの主張は、その後多くのマルクス主義者によって疑うべからざる公理として受け入れられてきた。すでにみたように、日本共産党などは今なお、この主張を正しいものとみなしている。ところが、すでに今から一〇〇年近く前に、エンゲルスのこの主張に疑問を呈した人がいる。エドゥアルト・ベルンシュタインである。次に彼の言うところをみてみよう。

三 ベルンシュタインの科学的社会主義論批判

ベルンシュタインは長いイギリス亡命生活を終えてドイツに帰国して間もなく一九〇一年五月に「社会科学学生連盟」を名乗る学生団体の求めに応じて「科学的社会主義はいかにして可能か」と題する講演を行った。この講演は従来わが国では一部の識者¹²⁾を除きあまり注目されて来なかったが、本稿のテーマからみると、きわめて重要なものである。

この講演の中でベルンシュタインは、科学的社会主義という概念に対して根底的な批判を展開している。順を追って彼の主張の跡をみることにしよう。

彼はまずマルクス、エンゲルスが「科学的」であることを自称した唯一の社会主義理論家でもなければ、最初のそれでもないことを指摘する。十九世紀のほとんどすべての社会主義者は、いずれも自説を「科学だ」と主張し、相手の理論を「ユートピアだ」と非難して張り合ったのであった。「科学」という表現は十九世紀のいわば流行語なのであった。このような社会主義諸派の間の生存競争に勝ち抜いて勝利者の地位を占めたものがほかならぬマルクス主義なのであるが、このマルクス主義にも批判的能力をもった人間ならば当惑しかなないようないくつかの問題点がある、

とベルンシュタインは述べて、社会主義の科学性を根拠づけたエンゲルスの周知の二つの根拠を順に検討していく。まず剰余価値学説について。もしエンゲルスの言うように剰余価値の発見——ベルンシュタインによれば、これも何もマルクスの功績ではなくマルクスよりずっと以前に知られていたことであるが——が、社会主義を科学にしたというのであれば、剰余価値の科学的説明と社会主義の間には、前者が後者を「必然化する」という形で一つの内的関連がなければならぬはずである。ところが、エンゲルス自身が一八八四年に書いた『『哲学の貧困』ドイツ語初版への序文』の中でみずからこのような見解を否定しているのである。彼はいう。「ブルジョア経済学の諸法則に従えば、生産物の大部分はそれを作り出した労働者のものではない。そこでもしわれわれが、それは不正だ、そうあるべきではないなどと言ったとしても、それは経済学にはさしあたりなんの関係もない。われわれはただ、このような経済的事実はわれわれの道徳的感情と矛盾している、と言っているにすぎない。であるからこそ、マルクスは、決して彼の共産主義的諸要求の基礎を道徳的感情におかないで、われわれの眼前で日ごとにますます生じつつあるところの資本主義的生産様式の必然的崩壊のうえにおいてしたのである。彼はただ、剰余価値は不払労働よりなる、という単純な一事実を述べているにすぎないのである」¹³と述べて、剰余価値の発見は、単なる経済的事実の認識にすぎず、社会主義はもっぱら「資本主義的生産様式の必然的崩壊」の上のみ根拠づけられている、と主張している。「資本主義的経済体制の必然的崩壊」は、すでにみたように唯物史観から引き出されるものであるから、ここでエンゲルスは、唯物史観の発見のみが社会主義を科学にしたと述べていることになる。彼はここで数年前の自分自身の主張をくつがえしているのである。

それではエンゲルスによって科学的社会主義のもう一つの礎石とされた唯物史観についてはどうであろうか。この講演では唯物史観についてはごく簡単にしかふれられていない。ここではただ社会主義者の中で今まで科学的だと思

われてきたさまざまな仮説——賃金鉄則、窮乏化論、工業と農業における発展の平行説、資本家階級溶解説など——も今日では誤り、いや部分的真理としか考えられていないという事実をあげて、唯物史観といえども修正をまぬがれないことを暗示しているにすぎない。ところが、この講演の二年前、一八九九年に出版されたベルンシュタインの著『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』⁴⁾の中では唯物史観に対して後にエンゲルスによってなされた修正が詳しく論じられている。

本稿第二節でも引用した『経済学批判』序言の中の唯物史観の公式は、きわめて決定論的であり、上部構造が下部構造によって一元的に決定され、また下部構造自体も「鉄のような必然性」をもって法的に決定されたコースを動いていくと説くものであった。このような見解からみれば、人間は単に経済的諸力の生ける代行者にすぎなくなり、人間の意識や意志は、物質的運動に極度に従属した一要因におとしめられてしまう。だが、エンゲルスは晩年のいくつかの書簡の中でこのような見解を大きく修正したのであった。

それらの書簡の中から一八九〇年九月二一日付けのヨーゼフ・ブロッホ（在ケーニヒスベルク）宛の手紙をみることにしよう。そこには次のように書かれている。

「唯物論的歴史観によれば歴史において最終的に規定的な要因は現実生活の生産と再生産である。それ以上のことをマルクスも私も今までに主張したことはありません。さて、もしだれかがこれを歪曲して、経済的要因が唯一の規定的なものであるとするならば、さきの命題を中味のない、抽象的な、ばかげた空文句にかえることになります。経済状態は土台です。しかし上部構造のさまざまな諸要因——階級闘争の政治的諸形態と、闘争の諸結果——たたかいを勝ちとったのちに勝利した階級により確定される等の諸制度——法形態、はたまたこれら現実の諸闘争すべての、これに関与した者たちの頭脳への反映、すなわち政治的、法律的、哲学的諸理論、宗教的見解とその教義体系への発

展が、歴史的な諸闘争の経過に作用をおよぼし、多くの場合に著しくその形態を規定するのです。それはこれらすべての要因の相互作用であり、そのなかで結局はすべての無数の偶然事……をつうじて、必然的なものとして経済的運動が貫徹するのです¹⁶。

また一八九四年一月二五日のW・ボルギウス（在ブレスラウ）宛の手紙には次のような一節がみられる。

「政治的、法律的、哲学的、宗教的、文学的、芸術的などの発展は、経済的發展に立脚しています。しかし、それらの発展はまたすべて、相互に反作用し合いますし、経済的土台に反作用します。経済状態が原因で、それだけが能動的で、他のものはすべて受動的な結果にすぎないというわけではありません¹⁶」。

これらの引用から明らかのように、晩年のエンゲルスは、上部構造の相対的独自性やその下部構造への反作用を認めるにいたったのである。それによって歴史を形成する諸要因はずっと拡大されることになった。

そこで次のような問題が生じてくる、とベルンシュタインはいう。すなわち、このような仕方では他の諸要素の添加によって、唯物史観を拡張してゆくならば、唯物史観はどの点まで、なお唯物史観という名称を主張しうるのか、と。そしてベルンシュタインは、高度に決定論的なひびきをもつ唯物史観という呼称にかえて「経済史観」という呼称を用いるべきことを提案している。マルクスの功績は、歴史において経済のもつ決定的な力を強調したことにある、とベルンシュタインは考えるからである。

唯物史観の公式からは「資本主義的生産様式の必然的崩壊」が結論されうる。すでにみたように、エンゲルスは『哲学の貧困』序文のなかで、マルクスは社会主義をもっぱらこの崩壊の上に根拠づけた、と述べていた。ところが、この資本主義的生産様式の必然的崩壊に対してもベルンシュタインは、さまざまの疑問を提出する。①この崩壊とは一体何なのか。経済的崩壊（経済的大破局）なのであるか。それとも、資本主義的生産様式の上に築かれている社

会秩序そのものの崩壊なのであろうか。②崩壊が必然的だとは科学的に証明可能なのであろうか。それは多かれ少なかれ蓋然的な推定にすぎないのではないか。③この崩壊から科学的必然性をもって社会主義が結論されるのか。これらの問題についてマルクス主義者の側からの回答はかなりばらばらなのである。

以上はベルンシュタインの見解であるが、ここでこの二点について筆者自身の見解を述べておきたい。筆者もかねてから剰余価値の発見がなぜ社会主義を科学にしたのか理解できなかった。剰余価値の発見は資本主義経済における搾取の秘密を暴露したものであり、何人といえども認めざるをえない客観的事実であるから、資本主義経済学を科学にしたとはいえるかもしれない。だが、社会主義を科学にしたとは、とうてい言えない。剰余価値の事実から直ちに必然的に社会主義が出てくるわけではないからである。それはちょうど奴隷制社会においては、奴隷は自分が消費するよりも多くのものを生産しなければならぬという事実の発見が奴隷に基礎をおいた社会秩序を否定する科学的証明にならないのと同じことである。

唯物史観の発見についても、この史観を正しいとみる人にとっては、この発見によって社会主義は科学になったといえるかもしれないが、歴史にそのような一元的な発展法則はなく、歴史は社会主義に向かって必然的に進んでいくわけではないと考える人にとっては、この発見は何ら社会主義を科学とするものではないのである。

最後にベルンシュタインは、この講演の中で、科学と社会主義とを峻別し、はたして社会主義は科学でありうるかを問うている。彼によれば、科学とは事実の客観的な認識をめざすものである以上不偏不党なものであって、いかなる党派、いかなる階級にも属さないものである。他方、社会主義はあるべき社会をめざす理想主義的要素を含む運動である。そこには人間の主観的願望があり、階級の利害がある。それはひとつのイデオロギイである。「いかなるイデオロギイも科学ではない」。それゆえ社会主義を科学と呼ぶことは間違っている。だが、意図された目標に犠牲少なく、より確

実に、より早く到達するために、道案内人として科学の成果を利用することはできる。それゆえ必要な時に必要なだけ科学的社会主義が可能である、と要約することができる。これがベルンシュタインの結論であった。

科学は認識にかかわるものであり、社会主義は価値にかかわるものであるから、本来この両者は全く別のものであり、科学的社会主義が即自的に成り立つことはない。社会主義と科学とは厳格に区別されていなければならない。こうして、ベルンシュタインは一旦科学と社会主義とを峻別する。しかし、その後で彼は両者の再結合を図る。社会主義の側が意図した目標を実現するために科学の成果を利用するという形においてである。そのかぎりでは社会主義は科学たりうる。この講演は「必要なだけ科学的社会主義が可能である。すなわち、科学的社会主義は、根本的に新しいものを創造しようとする運動の教義から理性が求めうるだけ、それだけ可能である」という言葉で終わっているが、その意味は上述のところから理解されうるであろう。

四 社会主義が「科学」である恐ろしさ

前節でみたように、ベルンシュタインは、社会主義と科学とを峻別し、社会主義はひとつのイズムであって、倫理の領域に属するものであるとした。だが、彼のこのような主張は、正統マルクス主義者の間では真面目に相手にされなかった。彼らの間ではエンゲルス流の科学的社会主義論が疑うべからざる真理と考えられてきたのであった。

歴史の中には一元的な発展法則があり、それは社会主義社会の実現を目指して進んでいるのだ、というのがエンゲルスの見解であった。ところで、この発展法則はすべてのプロレタリアートによって等しく認識されるわけではなく、その先進的な部分、つまり共産主義者によって認識されるのである。『共産党宣言』は第二章「プロレタリアと共産主義者」のところである。「共産主義者は、実践的には、すべての国の労働者政党のうちで、もっとも断固たる、た

えず推進してゆく部分であり、理論的には、プロレタリア運動の条件、進路、一般的結果を洞察している点で、プロレタリアートの他の大衆にまさっている¹⁷⁾と。つまり、共産主義者は、実践的にはもっとも断固とした推進的な「部分」であり、理論的には歴史のすべてを洞察しているもっとも先進的な人々である、というのである。

このように理論的・実践的にプロレタリア大衆にまさっている共産主義者が集まって前衛党（＝共産党）を形づくることになる。この共産党の指導的地位について旧ソ連憲法（一九三六年憲法第一二六条）は次のように規定していた。

「労働者階級、勤労農民および勤労インテリゲンツィアのうち最も積極的かつ意識的な市民は、自由意志にもとづいて、共産主義社会を建設するための闘争において勤労者の前衛部隊であり、かつ勤労者のすべての社会的ならびに国家的組織の指導的中核をなすソ同盟共産党に団結する」¹⁸⁾。

エンゲルス流の科学的社会主義論は、結局のところ、このような前衛党論に行きつくことになる。こうした論理の流れをもう一度要約してみると次のようになる。①歴史には必然的に社会主義へと向かう一元的な発展法則がある。②この発展法則は、共産主義者によってのみ完全に認識されうる。③それゆえ、共産主義者たちは集まって前衛党を形成し、この法則に従って、おくれた大衆を導いて地上に天国を実現すべきである。

こうした論理によると、前衛党は、学問的には「真理」を、道徳的には「善」を体現していることになる。このような前衛党がひとたび革命に成功して政権を握ると、政治的にはきわめて恐ろしい体制を作り出すことになった。それは一体何故であろうか。この点は二つに分けて考察されなければならない。前衛党内部における問題と、前衛党と大衆との関連における問題とである。

まず、前衛党内部の問題から考えてゆこう。歴史に発展法則があるといっても、それはきわめて漠然とした抽象的

なもので、そこから具体的な社会主義建設の方針が自動的に出てくるわけではない。マルクス主義者は未来社会の青写真を書かないということのみならず、科学性の証明としていたほどであるからなおさらであった。したがって、前衛党内には社会主義建設の方針をめぐってさまざまな分派が形成されることになる。こうした対立は、パーソナリティーの対立も加わり、大きな権力闘争へと発展していく。この権力闘争に勝った者の見解が真理とされ、それより左の者は極左冒険主義、右の者は右翼日和見主義として断罪されていった。この闘争に敗れた者は「人民の敵」「帝国主義の手先」「敵階級のスパイ」などと最大限の悪罵を投げつけられて粛清されていき、他方、勝者は無限に神格化されて、政治の領域のみならず、学問や芸術のあらゆる領域にわたって、万能の指導者となっていった。スターリンが、言語学、遺伝学などあらゆる領域に発言したことは、われわれのあまねく知るところである。かつて江青女史が、権力闘争に敗れて法廷に引き出された時、「われわれはなぜ裁かれているのだ、それはわれわれが敗れたからだ」と述べたと伝えられているが、それはまさに至言であった。もし江青女史の一派が勝っておれば、彼女は裁く側にまわっていたはずである。

前衛党が学問的には「真理」を、道徳的には「善」を独占している国家では、国民の間にも精神の自由（思想の自由、学問の自由、信教の自由など）はありえない。なんとすれば、前衛党を批判する者は、ただちに学問的には「誤り」を、道徳的には「悪」を主張していることになるからである。絶対的に正しいものを批判する時には、常に批判者の側が誤っていることになるからである。

精神の自由は、国家が真理とか道徳とかの価値に対してあくまでも中立を保っている国家（カール・シュミットのいう中性国家）においてのみ保証されるのであるが、科学的社会主義の理論は、その本来の哲学からして、そのような国家を作りえないのである。

以上の考察で、私は歴史に一元的な発展法則があり、それを完全に認識したと称する前衛党が、遅れた大衆を指導して地上に天国を実現するという理論は、前衛党の中にも大衆の中にも、精神的自由の全くないおそるべき社会を作り出すものであることをみてきた。今日の社会主義国の恐ろしい全体主義独裁を作り出したものは、まさに「知の支配」とも言うべき科学的社会主義の理論なのであった。こうみてくると、日本共産党の言うように科学的社会主義さえ堅持しておれば、やがて地上に真の社会主義社会を作り出しうるなどという思想は全くの誤りであることが分かる。そんなことをすれば、人類はもう一度暗黒の全体主義に逆もどりすることになる。

たしかに日本共産党も、「はしがき」であげたような著書の中で、言論の自由を守り、国定哲学を排し、議会制民主主義と複数政党制、政権交代を認めるとのべている。しかし、そのような態度は、相対的価値観の上に立脚してはじめて可能なのであって、科学的社会主義を唯一絶対の真理とする態度とは両立しえない。科学的社会主義などは、早くドブに放り込んでしまいうにしくはないのである。

五 むすび

このたびのソ連・東欧における社会主義体制の崩壊をみて、これによって社会主義の理想が死滅したわけではない、なんとすれば、自由、平等、平和、公正、正義、連帯、福祉などを求める人間の欲求は不変だからだ、というような主張が多くみられた。

だが、われわれがはっきりと確認しておかなければならないことは、これらの価値は科学的社会主義によって実現されなかったという事実である。これらの価値は科学的社会主義の理論にもとづく暴力革命や革命独裁によって決して実現されないものであり、人間のよりよい社会を目指す倫理感にもとづいて徐々に実現していくほかはな

いものなのである。その点でわれわれは、社会主義を「科学」から解放して「倫理」とすべきことを主張したベルンシュタインの知恵に多くを学ばなければならない、と思う。

その際、次のような視点が必要である。①人間はどんなに有能な人であってもけっして全てを認識することはできず、その認識は常に不完全である。この世に絶対正しい人や党は存在しない。②それゆえ、相対的価値観に立脚して、相互の十分な討論と説得を通じて国民共通の利益を追求していかなければならない。③社会の変革は、暴力革命や独裁によらず、漸進主義による改良の積み重ねによって徐々に起こさうべきである。¹⁹⁾ 歴史を一挙に飛躍させて質的に全く異なった完全無欠な社会を作り出すことなど人類には本来不可能なのである。

説

[注]

論

- (1) 日本共産党中央委員会出版局『科学的社会主義のすすめ』(一九九〇年)
- (2) 志位和夫『科学的社会主義とは何か——学説・運動・体制の観点から』(新日本出版社、一九九二年)
- (3) 不破哲三『対話 科学的社会主義のすすめ』(新日本出版社、一九九五年)
- (4) Friedrich Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. *Marx Engels Werke* — 以下 *MEW* と略記 — Bd.19. S.209. 『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店) — 以下『マル・エン全集』と略記 — 第一九巻、二〇六ページ。
- (5) *Ibid.*, S.210. 同右、二〇六―七ページ。
- (6) *Ibid.*, S.208. 同右、二〇五ページ。
- (7) Karl Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie, Vorwort. *MEW*. Bd.13. S.8-9. 『マル・エン全集』第一三巻、六―七ページ。
- (8) Karl Marx. Das Kapital. *MEW*. Bd.23. S.790-791. 『マル・エン全集』第二三巻第二分冊、九九四―五ページ。

- (9) ローザ・ルクセンブルクも社会主義の歴史的必然性の認識こそが社会主義を科学にしたのだと述べている。たとえば、次のようにである。「プロレタリアートの階級闘争が進展していくなかで獲得された最大の成果は、社会主義実現のための端緒が資本主義社会の経済的諸関係のうちにみいだされたことである。これによって社会主義は、一千年このかた人類の念頭にうかんでいたひとつの『理想』から歴史的必然へと転化した」(Rosa Luxemburg, *Sozialreform oder Revolution? Rosa Luxemburg Gesammelte Werke*. Bd. I / I. Dietz Verlag Berlin. 1972. S. 409. 『ローザ・ルクセンブルク選集』(現代思潮社、一九六三年)第一巻、一九九ページ。
- (10) Engels, *op. cit.*, S. 209. 『マル・エン全集』第一九巻、二〇五—六ページ。
- (11) Eduard Bernstein, *Wie ist wissenschaftlicher Socialismus möglich?* (Verlag der Sozialistischen Monatshefte, Berlin 1901)
- (12) 古いものとしては、波多野鼎著『新カント派社会主義』(日本評論社、一九二八年、社会科学叢書、第一二編)をあげることができる。本書では、第三章に「ベルンシュタインの唯物史観修正と科学的社会主義の廃棄」なる一章が設けられ、この講演に言及されている。だが、ここでは、この講演は「科学的社会主義を空想的社会主義にまで逆転させる」ものであるという低い評価しか与えられていない。社会主義が道徳的価値とかかわるものである一方、科学は不偏不党な認識を目指すものであるから、両者は全く別のものであり、科学は価値から解放されなければならない、というベルンシュタインの「限界設定」の思想は、本書では全く考慮されていない。
- 逆に、ベルンシュタインの主張を積極的に評価するものに、清水幾太郎著『現代思想』上・下(岩波全書、一九六六年)がある。ここでは、ベルンシュタインの主著よりもこの講演の方により注意が払われ、その論旨が明快に紹介されるとともに、科学と社会主義の峻別を説くベルンシュタインの主張に肯定的な評価がなされている。
- また、本講演の邦訳は、私の知るかぎり二編ある。佐瀬昌盛訳「科学的社会主義はいかにして可能か」(エドゥアルト・ベルンシュタイン著、佐瀬昌盛訳『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』、現代思想、第七巻、ダイヤモンド社、一九七四年、二九一—三三二ページ)
- 関嘉彦訳「いかにして科学的社会主義は可能であるか」雑誌『改革者』一九七三年一〇月号、二二—三二ページ、一一月号、三二—四一ページ。

- (13) Friedrich Engels, Vorwort [zur ersten deutschen Ausgabe von Karl Marx' Schrift „Das Elend der Philosophie“]. MEW. Bd.21. S.178. 『マル・エン全集』第二二卷、一八四ページ。
- (14) Eduard Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie (Berlin, 1923). 邦訳は『くつかもあるが』一番新しうものとして注(12)の佐瀬昌盛氏の訳をみよ。
- (15) Engels an Joseph Bloch in Königsberg. MEW. Bd.37. S.463. 『マル・エン全集』第三七卷、四〇一—二ページ。
- (16) Engels an W.Borgius in Breslau. MEW. Bd. 39. S.206. 同右、第三九卷、一八五—六ページ。
- (17) Karl Marx, Friedrich Engels, Manifest der Kommunistischen Partei. MEW. Bd.4. S.474. 同右、第四卷、四八八ページ。
- (18) 宮沢俊義編『世界憲法集』(岩波文庫、一九六〇年)二五八ページ。
- (19) しかし、そうはいつでもアンシャン・レジューム末期のフランス、ツァーリズム末期のロシア、幕末の日本などのように暴力による変革以外ありえない場合もあるであろう。そのような場合に暴力を用いることはやむをえないことであるが、暴力による変革は多くの犠牲を生むにもかかわらず、必ずしも素晴らしい社会を生みだすとは限らないことを銘記しておかなければならない。

(一九九五年九月二一日)

説

論